

ロシア社会と文化

田 辺 三千広

はじめに

この講義の主題は、社会が混乱し、乱れた世の中になってしまったとき、その混乱を収め、安定した平和な世の中にするには、文化のもつ役割が重要であるということを示すことです。それを示すため、近年ロシア社会で起こった社会的大混乱とそれを治めていった過程について歴史を材料にして紹介しようと思います。

現在の日本は平和な社会だといえるでしょうか。毎日のように事件・事故が起っています。最近、特にひどいのが、詐欺事件や殺人事件の多さです。振り込め詐欺やマンションの不正建築が連日報道されています。高校生が同級生の女子生徒をめったざしにした事件、大阪の姉妹が深夜帰宅してすぐに殺された事件、小学1年生が殺されて段ボール箱に詰め込まれて遺棄された事件は目新しいものです。そのほかにも親が幼児を虐待して殺したり、逆に、子が親を殺したりといった事件があまりに多く発生しているとは思いませんか。昔なら殺人などという非道なことはある特殊な人々の属する社会での出来事でした。それが今では日常のことになり、いつ我々の身の回りで起こっても不思議のない時代になっています。また、毎日のようにひたたくり事件も起こり、昨日起こった事件も今日には忘れ去られてしまうという状況です。夜も一人で歩けないこのような社会を平和な社会と我々は呼ぶのでしょうか。むしろ混乱した不安定な社会と呼ぶのではないのでしょうか。混乱した不安定な社会を安定した暮らしやすい穏やかな社会に戻すために何が必要なのでしょうか。ここでは同じよ

うな、いや、それ以上のひどい混乱を経験し、現在、少しずつ安定を取り戻しつつあるロシア社会を振り返ってみて、今の日本社会を考える材料にしてみようと思います。

1．帝政時代のロシア

1917年にロシア革命が起こるまでの近代のロシアは帝政ロシアの時代と呼ばれます。一人の皇帝（ツァーリ）と一握りの貴族・高位聖職者が支配する専制君主政の国でした。しかし、15・16世紀のロシアは他のヨーロッパ諸国、例えば、イギリスやフランスなどとそれほど大きく違った政治体制をとっていたわけではありません。すなわち、当時はヨーロッパ各地で絶対主義的な近代国家が誕生してくる時期でした。ロシアもモスクワを中心に近代国家が形成された時期にあたります。しかし、その後ヨーロッパ諸国は急速に近代化を進めます。地理上の発見などでお分かりのように新しい科学技術が進歩し、さらには産業革命を経験し、資本主義化を進めていきました。

ロシア自身が他のヨーロッパ諸国に比べずいぶん遅れを取ってしまったことに気がついたのは1812年に起こったナポレオンのモスクワ遠征のときでした。ロシアの有名な作家トルストイの『戦争と平和』はこのモスクワ遠征でのロシア軍の勝利がメイン・テーマです。ぜひ一度お読みください。この戦争でロシア軍を率いるクツゾフ将軍は、有名な《後退焦土作戦》を採り、ナポレオン軍がモスクワに近づくと、モスクワの町に火をつけ、家も穀物倉庫も全焼させ、消火栓を全部壊してモスクワの町の北に広がる深い森に全員を隠れさせました。それゆえ、ナポレオン率いるフランスの大軍はロシア軍の抵抗もなくやすやすと首都モスクワに入場することができました。しかし、モスクワの町は全焼していました。長い行軍をしてきたナポレオン軍には宿舎も食べ物もありません。全員空腹でかなり疲れしました。やがて有名な《冬将軍》（マロース）がやってきます。空腹で冬の寒さを避ける宿舎もないナポレオン軍は戦意を喪

失します。それを見計らって森に隠れていたロシア軍が攻撃を仕掛けたわけですから、フランス軍はひとたまりもありませんでした。ナポレオンはぼろぼろになり、小数の部下を連れてパリに逃げ帰りますが、これがナポレオン帝国の終焉の始まりになったことは皆さんよくご承知でしょう。

逃げていくナポレオン軍をロシア軍がフランスまで追いかけます。そして、このときロシア軍、中でも、若い将校たちは初めてパリの街を見ました。彼らは腰を抜かすほど驚きました。自分たちの国の首都であるペテルブルクやモスクワ（当時は両首都）とまったく違った華やかな文化の薫り高い街パリに感激したからです。このとき彼らは自分たちの国の後進性を初めて意識します。それが約10年後の1825年に起こった《デカブリスト(12月党)の乱》でした。⁽¹⁾ フランスやイギリスの進んだ文化に触れた青年将校たちを中心に行われた専制政治打倒を掲げた政府に対する反乱でした。もちろんこの反乱は残忍に弾圧されてしまいましたが、ロシアの人々に改革・革命の必要性を意識させた最初の事件であったともいえます。

ロシアがこれほど他のヨーロッパ諸国に遅れをとってしまった大きな要因は農奴制でした。農奴とはもともと自由民であった農民がやがてその土地に縛り付けられ、移動の自由を失ってしまった人々を言います。中世のヨーロッパでは農奴制は普通でした。しかし、イギリスやフランスといった国々は、いち早くこの農奴制を廃止します。移動の自由を取り戻した農民で、農業では暮らしが成り立たなくなった人々が、農村を離れ、都市に流入し、いわゆる労働者となりました。これが産業を発展させた一つの原因です。これによって資本主義化は促進されていきました。一方、ロシアではこの農奴制が長く続きます。

ロシアの国土は広大です。耕作が可能な土地はいくらでもあります。しかし耕地はただ所有しているだけでは何の価値も生み出しません。それを耕す農民がいてこそ価値を持つてくるのです。当時、ロシアでは領地を持っているのは皇帝、貴族、教会・修道院でした。それ以外の国民は、そのいずれかの土地に

住んでいました。領地を持つ領主にしてみれば、できるだけ多くの農民が自分の領地内の畑を耕してくれると収入が増えて、助かります。逆に、農民にしてみれば、できるだけ労働条件の良い、つまり、年貢の安い領主の下で働いたほうが生活も楽になります。そこで農民は、より条件の良い領主のもとに逃亡し始めました。逃げられた領主は、それだけ自分の土地から入る収入が減りますから、力づくで農民が逃げないようにし、逃げた農民には追っ手を差し向けて連れ戻してきました。こうして、農民は移動の自由を奪われ、土地に縛り付けられていきました。これが農奴です。ロシアでは今日までも慢性的な労働力不足です。当時、国民の9割を占める農奴が、同じ土地に縛り付けられ、移住の自由、職業の自由を奪われていたことから、他のヨーロッパ諸国で始まった資本主義的な動きに十分対応するだけの都市に住む労働者階層の確保は絶望的でした。これが近代的な産業社会への転換が図れず、遅れをとった大きな原因と考えられます。先に述べました《デカプリストの乱》を引き起こした青年たちも、この農奴制の廃止を強く主張しました。

9割の土地に縛り付けられ農奴となった農民たちは、しかしながら、苦しい生活環境にもかかわらず、自分たちの豊かな文化を形成していきました。領主の厳しい年貢の取立てに苦しめられながらも、歌や踊りやさまざまな祭りなどを通して、地域の農民同士が交流を深め、生活する喜びを生み出していました。こうして彼らは貧しいながらも比較的穏やかで平和な生活を送っていたようです。そして、その生活の中心になったのが教会でした。ロシアの農民はとも信仰心が篤く、教会の行事にも積極的に参加しました。例えば、教会で鳴らされる鐘の音は時刻を知らせる時計のような、また、色々な行事の始まりを告げるラジオのような役割を果たしました。彼らの一日の生活、一年の生活の基準・規範となったのが教会でした。一年のうちでいつ種を播けばよいのか、いつ収穫をすればよいのかは、すべて教会のカレンダーに従っておこなわれました。また、人々は、教会で結婚式を挙げたり、葬式を出してもらったりもし

ました。悩み事・相談事があれば教会の司祭のところを訪ねます。子供たちは字の読み書きを習いに教会や修道院に通いました。教会の重要な祭り、例えば、クリスマスやイースターは各地で盛大に祝われました。各家庭の東側の隅にはイエス・キリストや聖母マリアや聖人のイコン（聖像画）⁽²⁾が飾られ、その前では毎日ローソクが焚かれました。彼ら農民の村での生活のすべてが教会のカレンダーに則っておこなわれていたといっても過言ではありません。それほど農村での生活とロシア正教キリスト教の結びつきは強いものでした。

それゆえ、教会の聖職者に対する信頼はとても強いものがありました。地元の聖職者に対してだけではありません。ロシア教会の頂点に立つロシア皇帝に対する信頼感は大変なものでした。ここからロシアの農民の《ツァーリ信仰》が生れてきたといえます。ロシアの農民はどんなに苦しいときでも、自分たちを苦しめているのはツァーリではなく、ツァーリの周りにいる側近たちであると考えます。父であるツァーリは必ず苦しむ自分たちを救ってくれると信じていたようです。⁽³⁾

このようにして、ロシアの農村文化とロシア正教の文化が長い間の伝統となり、ロシア社会の安定を支えてきたといえます。しかし、歴史は社会の安定をいつまでも許しはしませんでした。労働力不足による農奴制の存続、それに伴う政治や経済の遅れがやがて表面化してきたことは先に述べました。これが都市において、特に、インテリゲンツィア（インテリ層）の中に革命思想を芽生えさせます。最初に革命運動を提唱したのは《ナロードニキ（人民主義者）》⁽⁴⁾といわれる人々でした。彼らは革命の主体を国民の9割を占める農民におきました。農民層が立ち上がれば、革命は成功し、ツァーリ政府は転覆すると考えました。しかし、農民層は《ツァーリ信仰》が強く、革命にそれほど積極的になれず、結局挫折し、ナロードニキの一部はテロ活動に走ることとなります。こうして農民層を革命の中心にすえようとしたナロードニキの運動は失敗します。

それに対してレーニン率いるマルクス主義者は革命の主体を都市で悲惨な生活を強いられていた労働者階級に置きました。こうして起こったのが1917年のロシア革命でした。これによって長年存続してきたロマノフ王朝の皇帝ニコライ二世はじめほとんどの一族は殺され、王朝は滅び、共産党の一党独裁による世界初の社会主義政権の国が誕生することになります。⁽⁵⁾

2. ソビエト連邦時代の人々の生活

1917年にロシア革命が起こり、以後、ロシアは世界初の社会主義国家を経験します。初めての試みであり、世界は賛否を問わず注目しました。共産党に指導されたソビエト連邦は、その後ももう一方の超大国アメリカと二大陣営を形成し、世界に大きな影響力を誇示してきました。

その後70年続く世界初の社会主義国ソビエト連邦が目指したのはすべての土地を国のものとし、特権階級をなくし、ロシア人が全員公務員になり、自分の労働に応じて給料を受け取る理想の国家でした。すなわち、ロシアには失業者もこじきもない国づくりを目指しました。このとき、帝政時代に特権を享受してきた教会や修道院も《宗教はアヘンなり》とされ、徹底的に弾圧されました。ロシア正教は国教の地位を追われ、ロシアは無神論の国になりました。教会や修道院の大部分は財産を没収され、閉鎖されました。教会は壊されたり、倉庫や資材置き場として使われたりしました。なかには国民に無神論を叩き込むための自然科学博物館として使用された教会もありました。そして、これまでのキリスト教文化は一掃されたのでした。

ソビエト連邦時代、国民の生活は確かに改善されました。失業は無くなり、最低限の生活は保障されたようです。しかし、失うものも多かったのです。紙面の関係でここでは一例だけ示しておきます。国民は、最低限の生活を保障されていたにもかかわらず、一塊のパンを求めて長い行列に耐えなければなりませんでした。スターリン時代からブレジネフ政権にかけての思想の自由の制限

と工業政策・農業政策の失敗です。物不足や言論の自由・思想の自由のないことが国民を苦しめてきました。当時、ソ連を訪問すると、街を歩く人々は全員かばんなどのほかに必ず買い物袋を持っていました。普段品切れで手に入らない商品が店に並ぶと、人々は必要であろうとなかろうと行列をして買えるだけ買っておきました。そうでないとこの次いつそれが買えるかわからなかったからです。ソ連邦では計画経済のため国家が今年は何をどれだけ作るかを決め、国民が求めるものを作るわけではないので、品物によっては不足するものがたくさんでき、行列をしなければならなかったわけです。

初めてソ連に行ったとき、よく公園のベンチに座り休んでいました。必ずと言っていいほどロシア人の年寄りが近寄ってきて話しかけてきました。彼らはとても善良で話し好きなのだと思いました。ロシア人は一般的に人間好きでもてなしの上手な国民です。色々日本の事を聞いてきました。そして別れ際に行列をして袋いっぱい買ったものを一つ私にくれました。ある老婆はマッチばかりを袋一杯持っていました。また、別の老婆は乾パンを袋一杯持っていました。こちらがお礼を言って、ソ連のことをほめると突然表情を曇らせました。ソ連はそんなに暮らしやすいところではない。いつも我々の行動は秘密警察によって見張られていると小声で言って別れて行きました。物不足と言論の自由のなさは外国人の目にもすぐにわかりました。

ロシア革命を経て、世界初の社会主義国家を建設し、失業者もこじきもない社会を目指したこの理想の国が大きな転機を迎えたのはレーニンの後を引き継いだスターリンが指導者になったときです。彼は、ソ連邦を危険視してきた大国のアメリカに対抗するため、国力の向上に努めます。《計画経済》と《農業の集団化》でした。これらのことが、先に述べたように国力の減退と社会の不安定を導くことになりました。そして、国民の不満を秘密警察を使って押さえ込むという《暮らしにくい、不自由な》国にしてしまったようです。

《計画経済》によって国民が本当に必要とするものを必要なだけ手に入れる

ことができなくなりました。需要と供給の関係で経済が動くのではなく、政府が何をどれだけ作るか決めるわけですから、国民にとっては購買意欲もわきません。他方、公務員となった労働者にはいわゆる《ノルマ》(これはロシア語)が課されました。これも労働意欲を失わせる結果に終わりました。すなわち、自分たちには何も創意工夫が必要でなくなり、決められた仕事だけをこなせば、それで賃金がもらえました。また、《ノルマ》をこなせば、それ以上の生産活動も不要でしたから、それほど一生懸命働こうとはしなくなるのも当然でした。こうして徐々に生産活動も減退していきました。

これと同じ欠陥が農業の分野でも現れます。《農業の集団化》も一見効率的に見えますが、実際にはロシアの農業と農村文化を根こそぎ破壊してしまったことになりました。ロシアには農民がいなくなり、労働者が農業をおこなうことになります。本来農業とは、一人の農民が土地を耕し、種をまき、収穫するまでの過程を一人でおこなうものです。こうして農業に関するさまざまな知識や技術を向上させてきました。ところが、農業の分野でも工業製品の生産のように分業化が導入されました。土を耕す人、種をまく人、作物を育てる人、収穫する人といった具合です。それゆえ、かつての農村の風景はなくなり、また、農業全般の知識・技術を持った、いわゆる、農民がいなくなってしまうました。これでは農業生産の向上も図れません。このことが、パンを求めての長い行列につながっていきます。

3 . ソビエト連邦の崩壊

工業と農業の失敗がロシアの国民を苦しめ、不満が高まり、新たな改革が必要とされてきました。その時、すなわち、1985年3月に登場したのがゴルバチョフでした。スターリン時代からブレジネフ時代までに積み重ねた国民の不満を和らげるため、彼は、《ペレストロイカ(再建)》と《グラ-スノスチ(情報公開)》という政策を打ち出しました。秘密警察による監視をやめ国民に思

想の自由を与えることにより、停滞する工業や農業の立て直しを図ろうとしました。そうすればこれまでどおりの共産党の指導によるソビエト政権が延命できると考えました。しかし、現実はそれ以上に進んでしまいました。待ち望んだ少しの自由を得た国民は、完全な自由を手に入れたかのように振舞い、一気にソビエト連邦の崩壊へと進んでいきました。この動きは長年ソビエト連邦の影響下にあった東欧諸国にも波及し、社会主義諸国の多くは自由主義の国に生まれ変わりました。いわゆる《ベルリンの壁の崩壊》がその象徴でした。

資本主義国になったロシアを待ち受けていたのは先に述べた社会の混乱でした。これまで貧しいながらも最低限の生活は保障されていたロシアの国民の多くは悲惨な生活を強いられるようになりしました。老人には年金が入らず、また、多くの失業者も生まれました。一気にこじき町にあふれました。一部の共産党幹部であった有力者たちがかつての国有財産を私物化し、財閥になりました。いわゆるマフィアです。軍がお金に困り武器を横流しし、町には拳銃や自動小銃だけでなくバズーカ砲や手りゅう弾のようなものまで売りに出され、それがマフィアの手にいきわたり、街は戦場のようにになりました。お金のない庶民は自分の身を守るためにナイフやナタを懐に隠していました。まったく物騒な時代でした。生活の糧を失った若者は、泥棒をせざるを得なくなり、日本人旅行者などは格好のターゲットになりました。

そのような時期に《ヴォルガの奥地》の探検旅行に加わることになりました。⁽⁶⁾新聞では毎日のように誰が殺されたとか、少し前にシベリアの農村に現地調査に出かけたある日本人研究者が、ホテルの部屋で首を切られたとかという話を聞いた直後のことでした。当然、成田からモスクワまでの飛行機の中では不安が一杯でした。しかし、モスクワの空港に着いて少しは安心しました。探検旅行を手伝ってくれた科学アカデミーの研究員の人々の出迎えを受けましたが、その中に現職の警察官がいたからです。研究員の一人の友人で、休暇をとって我々の旅行に同行してくれました。それゆえ、比較的安全でしたが、それでも

夜行列車でモスクワを出発するまではかなり危険でした。ロシアは当分この無政府状態が続き、滅んで国がなくなるのではないかとも思いました。とにかくひどい状態でした。

むすびにかえて

社会的混乱を克服するためには、伝統文化の再興が不可欠であると説いたのは《ロシアの良心》と呼ばれたりハチョフ氏(1906 - 1999)でした。彼は、スターリンの時代に古いロシア語の規則を擁護したことから、4年間強制収容所に入れられました。釈放後、ロシア文学研究所の研究者となり、以後亡くなるまでロシア中世文学の研究に励みました。研究所の中心的な存在となり、学会では大きな影響力を持ちました。⁽⁷⁾

ペレストロイカ以後、わが国の国会議員に当たる人民代議員として積極的に活動し、文化の復活と道徳の重視を訴えて《ロシアの良心》と呼ばれました。彼によりますと、混乱したロシア社会に秩序を取り戻すためには、社会主義時代の70年をロシア人全員が反省し、古いロシアの伝統文化を再興する必要があるというものです。

リハチョフ氏の言う伝統文化とは主にロシア正教キリスト教とそれに深くかわる農村文化です。ソビエト政権下では、《宗教はアヘンなり》としてキリスト教は壊滅的打撃を受けました。また、スターリンによる農業の集団化によって、ロシアの伝統的な農村は消滅しました。氏は、伝統文化を再興し、道徳心を取り戻さない限り、ロシアの復興はありえないと訴えます。今日、ロシアの国民の多くは、かつての国教であったロシア正教の復興に取り掛かっています。多くの人々、それも老人だけでなく若い人々が教会に通い、熱心にお祈りしている姿をよく見ます。また、壊されたり、放っておかれたりして、あばら家のようになってしまった教会を村人全員が協力して再建しようとしています。クリスマスやイースターも国中で祝われ、当時の大統領エリツィンも参加してい

る様子がテレビでも放映されていました。モスクワも整備され、街がきれいになっています。市内を走る車も今ではぴかぴかのベンツや BMW で溢れています。社会が安定してきたことを示しているのでしょう。かつての社会的混乱を克服しつつあるようです。街行く人々の表情もこれまでになく明るく、生き生きとしたものになっています。

ロシア人は芸術を好む国民です。それゆえ、経済発展に加え、伝統文化の復活も急速に進んでいます。それらが現在の社会的安定をもたらしているでしょう。

註

- (1) 《デカプリストの乱》については以下の文献参照。和田春樹編『ロシア史』 山川出版社 2002年 209-212ページ
- (2) 《イコン（聖像画）》の中心的図像はキリストと聖母子、他に聖三位一体、預言者、諸聖人などである。これは不可視的な神の世界を可視的にしたもので、単なる絵ではなく、礼拝の対象とされる。菩提樹、白樺、杉などの板に書かれる。卵の黄身を酢で溶かし、そこに顔料を加えて板に書く。なお、《イコン》については以下の文献を参照。高橋保行『イコンのこころ』 春秋社 1981年
- (3) 《ツァーリ信仰》については以下の文献を参照。土肥恒之『「死せる魂」の社会史』 日本エディタースクール出版部 1989年
- (4) 社会革命と《ナロードニキ》については以下の文献を参照。和田春樹編『ロシア史』 225-275ページ
- (5) 《ロシア革命》については以下の文献を参照。和田春樹編『ロシア史』 276 - 308 ページ
- (6) 拙稿「ロシア旧教徒ゆかりの地を訪ねて」 名古屋明德短期大学紀要 第7号 1994年12月 247-9ページ
- (7) D. リハチョーフ（長縄光男訳）『文化のエコロジー』 群像社 1988年 211 - 218 ページ

* 本稿は、2005年12月6日、本学経営学部の講義『文化教養ゼミ』で読まれた原稿に加筆したものである。

